

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

## 研修報告書 (2017年度 助成者)

作成日 2017年8月25日

氏名 (フリガナ)	建部 壮 (タテベ ソウ)
研修先機関名	Hawaii Tokai International College
研修期間	2017年8月14日 (月) ~ 8月19日 (土)
大学名	奈良県立医科大学
学年	5年

Hawaii Tokai International College (HTIC) での5日間の研修を通じて、医療英語、米国の医療事情、医療倫理など、大変多くのことを学ぶことができました。その中でも、プログラムの「目玉」ともいえるハワイ大学医学部 (JABSOM) の学生を模擬患者として問診を行う形式の医療面接と、米国での臨床経験のある先生方に対する症例プレゼンテーションの反復練習は特に貴重な経験になりました。

医療面接の基本的な考え方や問診の流れに関しては日本での客観的臨床能力試験 (OSCE) や臨床実習を通じて学んできましたが、面接終了後即座に症例プレゼンテーションという形でのアウトプットを求められる問診は非常に負荷が高く、限られた時間の中で、患者さんの心情を意識しつつ必要な情報を余すことなく把握することの難しさを実感しました。その一方で、2~3回の面接とプレゼンの練習を3日間繰り返しただけでも見違えるようになったとのフィードバックを複数の教員から頂くことができ、練習を重ねて場数を踏む以外に上達の近道はないということを理解できました。米国の優秀な医学生の症例プレゼンテーションは内容が整理されていて組み立て方もうまく、その流れを聞いていれば発表者がまず何の疾患を疑い、何を鑑別に挙げ、何を除外したのかが手に取るようにわかり、自ずと病態に関する理解の深さも推し量ることができるという説明は特に印象に残りました。米国の医師や医学生は、知識量やさまざまな手技への習熟度よりもむしろプレゼンの上手さで実力を評価されるということを知り、医学知識や英語能力だけでなく医療面接と症例プレゼンテーションに習熟しておくことの大切さが理解できました。今回の研修では、医療面接や症例プレゼンテーションの上達の道筋を示してもらったとともに、目指すべきゴールを明確にできたことが最大の成果であったように思います。今後、医学生としてさまざまな疾患の病態や検査・治療に関する知識をインプットする過程においても、それらを問診やプレゼンというアウトプットにどのように反映させるのかという視点を常に持って勉強していく必要性を感じました。これからの大学での臨床実習や臨床研修の場面でも、限られた時間の中で患者さんから必要な情報をもれなく聴き、いかに上級医や他のスタッフに的確かつわかりやすく伝えるかということ意識し、経験を積み重ねていこうと思います。

本研修では、医療英語の教育だけでなくハワイの風土を感じる時間も十分にありました。研修の拠点であるHTICはホノルル市内から車で30分ほどの郊外にあり、ホノルル市中心部への日々の往復を通じてオアフ島の雄大な自然の一端を感じることもできたほか、JABSOMやSt. Luke's Clinic, Kuakini Hospitalなどのホノルル市内での施設見学の合間に街中での散策を楽しむことができました。また、全国から集まった医学生たちと協力して夜遅くまで一緒に原稿を作り、発表の練習をしたことはとてもよい思い出になりました。本研修で得られた同じ志を持つ仲間とのつながりを、これからも大切にしていきたいと思っています。

最後になりますが、本研修で指導して頂いた多くの先生方、HTICスタッフの方々、貴重な機会を与えてくださった日米医学医療交流財団の皆様、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。